



「東京五輪・パラリンピックを控え、日本が海外から注目される今、邦楽の現状を何とか変えたい」と梅原さん

## 19歳で店を始める

板張りの小上がりに設けた2畳ほどの作業場で店主の梅原久史さん(42)は三味線独特の共鳴音「さわり」をビーンと響かせ、音の仕上がりを確かめた。

秋田市の中心部を通る南大通り。梅屋楽器店は、濃紺の日よけのれんに染め抜く「琴・三弦師」の文字が目印。三味線作りや琴の修理を行う職人がいる証でもある。和楽器の販売からメンテナンスまで行うこの店を一人で始めたのは、梅原さんが19歳の時だった。

## 未開の地で道を開く

右も左も分からずに来た秋田。実家は仙台市で和楽器屋を営んで88年、山形にも店を出す梅屋楽器店。祖父、父と続く老舗の次男に生まれ、長男は実家の3代目に。梅原さんは高校卒業後、広島県内の和楽器製造元での修業を経て、2カ月間、実家で仕事を覚えた。「その時、父に言われたんです。

# 町の和楽器屋さん

【梅屋楽器店】秋田市中通六丁目4-23 TEL.018-837-6151

三味線、琴、尺八、横笛…。楽器の販売のみならず、三味線の組み立て、皮張り、糸かけ、バチ調整、琴の糸締め、調弦など、和楽器屋の仕事は幅広い。伝統文化を守るため、熱く音に向かい合う。



「うちは仙台、山形、新潟にはお客さまがいるけれど秋田はいない。だから久史、秋田で店をやりなさい。経営もやってみなさい」と。今思えば手荒ですよね」。当時を振り返って苦笑する。営業に出るが、経験の浅い新参者は当然門前払いされた。店をつぶすまいと必死だった20代。「秋田には親戚も友人もおらず、頼る相手のいない環境がなくて良かったのかもしれない。失敗は数々。その都度、お客さまに教わり、鍛えていただきました」

## 職人として続く挑戦

和楽器の調子や音は、職人の腕次第。「硬い音に「明るい音に「今

より楽な力で弾きたい」。客の求めは多様。好みや希望、年齢や手の力加減、演奏する曲など、事前にたくさん情報を聞き出し、理想の音や弾きやすさを追求する。お客さまが出演する舞台に同行し、楽器で楽器や音の最終調整を行うことも大事な仕事。「求められた音が出せた経験は生涯の宝。でも、それはその時の自分ができる精一杯のことをやっただけ。まだ足りないし、自信はありません。満足したら終わり。音楽や芸能は死ぬまで勉強ですから」

修理や同行の依頼を受けると

東京や海外にも出向く。海外で高く評価される日本の芸能。海外へ琴の修理に行った時、自国の音楽の尊さをあらためて気付かされたという。しかし今、演奏者の減少、楽器の材料となる動植物が入手困難な問題など邦楽は存続の危機にある。三味線には犬・猫の皮が使われるが、東京の演奏家らと研究会を立ち上げ、カンガルー皮の使用を模索する。「自国の音楽文化を失うことほど悲しいことはありません。私たちの業界が諦めては駄目」。音を受け継ぐ者として挑戦を続ける。